

進化する  
ボウラ

3

猫トみかん。

## 放課後（森さんと鳥野くん）

---

図書室である。

日が短くなり、下校時間も夏より早くなっていた。

その一方で、受験を控えて勉強をする生徒が増えてきたので、少しのざわめきと人の温度で窓ガラスは薄く曇っている。あっという間に落ちた夕陽は名残も引かず、外は夕方なのに夜のような暗さだった。

「暗くなると早くお家に帰りたくなりますね」

読書に飽きた森さんが、曇った窓ガラスの向こうの空を見透かすように、ぽつりと呟いた。

「俺は帰るのが億劫になるけどね」

人が多いせいで気が散ったらしい鳥野くんは、諦めたように読んでいた本をぱたりと閉じた。周りを見ても、ほとんどの生徒が勉強に飽いたようで、低いざわめきがそこここで生まれていた。

「あら。それはずっとわたしと一緒にいたいということですか？」

ぱっと森さんの背後に花が咲く。

「じゃあ森さんは早く俺と別れたいってことだね」

本を鞆にしまいながら、何気なく鳥野くんが言った。

「ち、違います！」

思わず大きな声を上げた森さんに、さすがに周囲の目が向く。「す、すみません」右に左に頭を下げて、森さんは肩を縮めると、恨みがましそうに鳥野くんを睨んだ。

「鳥野くん。ずっと一緒にいたいので、わたしもまだ帰りたくありません」

「そう？ 俺はもう帰るけど。人がいっぱいいて落ち着かないし」

「薄情者！」

森さんは再び周囲の注目を集めてしまい、すみませんすみません、と頭を下げたのだった。

## 小テスト（泉くんと桜木さん）

---

桜木さんは、目力をこれでもかと発揮していた。こんなに熱心に視線を送っているというのに、相手はうんともすんとも反応を返してくれない。

「こんなにわたしがみつめているのに、あなたは何も答えてくれないのね」

ドラマチックに桜木さんは呟いた。

「そりゃあ、答えなきゃいけないのは、桜木さんだから」

肩をすくめて、泉くんが言うと、桜木さんは机の上に突っ伏した。

「うあーん。何でこんなにわたしは頭が悪いのー！」

数学の武藤先生がお休みで、自習になった教室である。自習用のプリントが配られていたが、後でやるからいいやという生徒、さっさと終えてしまった生徒、そもそもやる気のない生徒で、教室内は幾分ざわついている。

うんうんと唸りながら未だ自習プリントと向かい合っているのは桜木さんくらいのものであった。

「いいじゃん。分からないままにしといたら、後で武藤先生に訊けるチャンスじゃんか」

ため息まじりに泉くんが言う。

「駄目。馬鹿な子だって思われたくないもの」

顔を上げて、桜木さんが言った。無造作に机に突っ伏したせいで、前髪が乱れている。

ちらりとそれを見て、泉くんは窓のほうへと視線を逸らした。

「もう手遅れだと思うけど」

「それを言うな！」

ばしっと桜木さんは教科書で泉くんを叩いた。

「はいはい。じゃあ優しい泉お兄さんが教えてあげましょう」

「うわー」

「うわーって」

「まあいいや。泉くんって馬鹿みたいだけど成績良いよね。理不尽」

「お前。ちょっと俺に対して容赦なさすぎじゃない？」

ぶつぶつと文句を言いながらも、泉くんは桜木さんから教科書を取り上げると、一問目から教え始めた。

半分ほどそうして進んだところで、桜木さんは悟りの境地に達した。

「もう。無理。きっとわたしと武藤先生が結ばれないように、わたしと数学も相容れない存在なのよ」

頬には穏やかな笑みさえ浮かんでいる。

「諦めが早いっての。ほら、こっちの問題に使う公式は、さっきの応用だから……」

「もういいのー。公式なんか当てはめたって、解けない問題は世の中にはたくさんあるんだから！」

半分ほど答えの埋まったプリントの上に、桜木さんは突っ伏した。

「おいおい」

泉くんは桜木さんの恥ずかしい台詞に苦笑する。

「ありがとう、泉くん。もう、いいから」

消え入りそうな声で、桜木さんが呟いた。泉くんは目を瞬いて、前髪を引っ張る。

「でも、桜木さんは答えを分かってるよね。それでも納得しないのは、どうして？ それとも納得してる上で、浸ってるの？」

言いながら、ああ、意地悪なことをやってしまったな、と泉くんは後悔した。

「…………いじわる」

「うん。そうだったかも」

桜木さんがのっそりと体を起こす。

「問題が難しすぎるので、解く公式を教えてください」

「はい」

ちょんちょん、と泉くんは窓ガラスを指差した。

「何？」

「よく見て」

じーっと桜木さんは窓ガラスに目を凝らす。窓ガラスには難しい顔の桜木さんが映っていた。隣りに映った泉くんが、おでこを指差す。

「あっ！」

桜木さんの額には、先ほど必死で解いたプリントの式と答えが移っていた。

「可愛いね、桜ちゃん」

泉くんは自分の答えに、すっきりしたように笑った。

## 嫌われない（雨宮くんと森さん）

---

「あれ、鳥くんは？」

教室にずかずかと踏み込みながら、雨宮くんが尋ねた。

森さんは、はっと顔を上げたけれど、答える義理もないとばかりに聞こえないふりをして目の前の日誌に集中する。

放課後の教室に残っているのは森さんだけのようだった。隣のクラスにはまだ何人か生徒が残っているらしく、時折笑い声が響いてくる。締め切った窓の向こうからは、部活動の気合を入れるような声がかすかに届き、下校する女の子たちが廊下をきゃっきゃと通り過ぎて行く。この教室の内側だけが切り取られた静けさの中にあるように沈黙していた。

「居残りさせられてるの？」

雨宮くんが森さんの前の席の椅子を引いて座る。

「日直だったんです」

見れば分かるでしょう、と森さんは苛立たしげに雨宮くんを睨みつける。

「鳥くんは？ 置いてかれたの？ 彼女なのに」

「用事があるので先に帰っただけです」

「なあんだ。やっぱり鳥くんはもう帰っちゃったのか」

相手の望む答えを与えてしまったことに気がついて、森さんは不機嫌な顔になった。ご機嫌になった雨宮くんは笑う。

「森さんは、俺のこと嫌いだよね」

「嬉しそうに言うことですか」

「あはは」

「鳥野くんだって、あなたのことなんか大嫌いですよ」

「うん」

なおも嬉しそうに頷いたので、森さんは眉をしかめて「変態ですね」と呟いた。

「人の好意がしんどいって、森さんは思ったことがない？」

「贅沢ね」

「そうかな。それは好きが善だという刷り込みがあるからだよね」

「好きだと思ってくれる誰かがいるのは幸せなことだわ」

「それこそ、刷り込み。押し付けだ」

「何が言いたいのか？」

「君の好意は鳥くんに迷惑だってこと」

森さんの握っていたシャープペンの芯が折れて、雨宮くんの手の甲に飛ぶ。

ため息を吐いて、森さんはかちかちとシャープペンの新しい芯を押し出した。

「雨宮くん。わたしは雨宮くんが嫌いですが、なるべく好きになるように努力することにしました」

「は？」

雨宮くんの眉がしかまる。

「だって、あなたは人に好かれるのが嫌なのでしょう？」

にこりと森さんが微笑む。

「嫌がらせかよ。最低だな」

「鳥野くんのヤキモチも狙っています」

「もっと最低だな！」

ふふふ、と森さんは魔女のように微笑んで、ぱたりと日誌を閉じた。

「安心してください。万が一、あなたがわたしのことを好きになったら、こっぴどく振って差し上げますから」

「ありえないから安心しろ」

苛立たしげに、雨宮くんが立ち上がる。

「怒りました？ わたしの思うツボですね」

「な！」

口を開く雨宮くんに、なおもにこりと森さんが微笑みかける。雨宮くんは何故こんな展開に！と心のうちで激しく憤りながら、理性を総動員して、何とか口元に笑みを作った。

「……………そんな短気なわけないだろう？ もう帰ろうと思っただけだよ」

「そうですか。では、一緒に帰りましょうか？ わたしもちょうど日誌を書き終えたので」

森さんは静かに立ち上がり、鞆と日誌を手に持つと、挑戦的に微笑んだ。

「……………ああ、構わないよ」

雨宮くんの返事が半ば投げやりになったのは否めない。

それでも、次に見せた森さんの笑みは少し意地悪を含みながらも、楽しそうなものだった。

## 作戦実行中（森さんと雨宮くん）

---

森さんはここ数日で、すっかり雨宮くんのうんざりした顔を見飽きてしまった。

反対に雨宮くんは、ここ数日ですっかり森さんの貼り付けたような笑みに夢でもうなされるようになってしまった。

「雨宮くん、一緒に帰りましょう」

放課後、森さんは雨宮くんの教室の前で待ち構えて、逃がさないというようにその腕を捕まえた。

「……………いいかげん、付きまとうの止めてくれる？」

雨宮くんは心底うんざりしたように、森さんの手を振り払う。

「わたし、だんだん燃えてきました。雨宮くんにわたしのことを好きだと言わせてみたいです」  
一方の森さんは何かに目覚めたように、瞳を輝かせている。

「本当に根性悪だな。それより、いいのかよ。鳥くんと帰らなくて」

言いながら、早足で歩き出した雨宮くんを森さんは慌てて追いかけた。早足なのは、鳥野くんも雨宮くんも同じだな、と思って、わたしは鳥野くん一筋ですよ、と心の中で呼びかける。

「いつも鳥野くんと帰っているわけではありません。それに、時々距離を置いたほうが、愛も燃えるというものです」

「そういう恥ずかしいこと、よく平気で言えるよな」

「恥ずかしがる雨宮くんが見たいと思いましたので」

「嫌な奴」

「褒め言葉ですね？」

雨宮くんの悪口も、すべて楽しんでいる森さんである。

雨宮くんはため息を吐いた。やられるばかりでどうにも分が悪い。押される一方というのも癢に障る。けれども、森さんの望み通りに好きだと言うのも負けを認めたようで許せなかった。

「変な奴だよな、お前。鳥くんのことも、こうやって無理矢理つき合わせてるんだろう」

「あら。鳥野くんはわたしのことを大好きですよ？」

当たり前のことを言うような森さんの言い方だ。

「信じられないね。断わるのが面倒だから付き合ってるんじゃないの？」

口の端を上げて、雨宮くんが一矢報いたかと森さんの顔を窺う。

けれども森さんは落ち込んで下を向いたりはしておらず、心持ち顎を上げて、少し考えるように宙を見つめていた。

「無理に何かを好きになる必要は、わたしはないと思います」

「何を唐突に」

「同じように、何かを無理に嫌う必要もないのですよ、雨宮くん。少なくとも鳥野くんは、その自由を知っている方です」

雨宮くんは息を吸いこんだ。苦々しげに吐き出そうとしたため息は、胸の内に落ちる。その重みで肩の力が抜けて、気づけば口は笑みを作っていた。

「そんなに俺に好かれないわけ？」

「わたしに振られる結果が見えてる雨宮くんは可哀想ですね」

「ふうん。逆に、あんたが俺を好きになって、こっぴどく振られる羽目になるかもよ？」

挑戦的な瞳には、強気な光が戻っていた。

「そんな展開にはなりませんよ」

森さんが目を細めて半眼を作ろうと試みる。

「当たり前だ。なつてたまるかよ」

雨宮くんの半眼は慣れたものだ。

帰り道はその後も、いがみ合いの応酬だったけれど、街灯の明りはどこかやさしく、二人の影を並べていた。



## 作戦実行中2（森さんと雨宮くんと鳥野くん）

---

たまには学食へ行きたい、という森さんと桜木さんの要望で、お昼は学食で食べることになった。メンバーは、森さん、桜木さん、鳥野くんに泉くんといういつもの顔ぶれである。そこに、一足先にやってきていた雨宮くんが席とりに巻き込まれて一緒に食べることになった。

「人使いの荒い奴」

「わざわざわたしたちのために先に来て席を取っておいてくれるなんて、たまには役に立つのですね、雨宮くん」

ふてくされる雨宮くんに、森さんはにこりと微笑んだ。

「はいはい。無理矢理役立たせたのは森さんですけどね」

「ありがとうございました」

「ふん」

雨宮くんは鼻を鳴らして、ずるずるとラーメンをすすった。向かいに森さんが座る。その両隣に、鳥野くん、桜木さん。桜木さんの向かいに泉くんが腰を下ろした。

「お昼の戦場、すごいねえ。もう来なくていいかな、と思ったよ」

「でも、あったかいご飯が食べられるのは嬉しいからなー」

ほのぼのと会話しているのは桜木さんと泉くんだ。

「……森さん、ちゃんと自分で食べきりなよね」

「う」

鳥野くんの言に、森さんは目の前の山盛りのランチに声を詰まらせた。から揚げにポテトサラダ。絵に描いたような大盛りのご飯に味噌汁。ひじきの煮ものとデザートにみかんもついている。お腹を空かせた男子学生にはもってこいだろうが、森さんの胃袋には少々厳しそうだった。

「なんでそんな無理そうなことしてんの」

雨宮くんは呆れ顔である。

「だって。滅多にない機会ですし、せっかくなら今日のおすすめランチとやらを注文したくなるのが人情というものではないですか！」

森さんの主張は理に適っているのかどうか、微妙なところだ。

「まあまあ。わたしも手伝ってあげるし」

「俺も俺も！」

「桜木さん、泉くん」

森さんは感動して涙を浮かべる。その隣りで鳥野くんはため息を吐いた。

「鳥野くんも手伝ってくださるのですか？」

ため息を返答と期待して、森さんがくるりと体を回す。

「手伝いません」

鳥野くんはにべもなく、自分の昼食をレンジで口に運んだ。炒飯だ。

「雨宮くんは手伝いましょう」

「おい、手伝いましょうって何だよ強制むぐ」

開いた口に、森さんが素早くから揚げを押し付けた。

「ありがとうございます、雨宮くん。もう一ついかがですか？」

仕方なくから揚げを咀嚼した雨宮くんは、森さんを睨む。けれども睨んでも効果がないと諦めたのか、はあ、と息を落とすと、

「分かったよ。仕方ないな」

自分の箸を伸ばして、森さんの皿からから揚げを一つ取り上げた。

「あら、本当に。ありがむぐ」

森さんの開いた口に、今度は雨宮くんがから揚げを押し付けた。

「甘えてないでちゃんと食べるよ、このくらい」

ふふん、と雨宮くんは勝ち誇った笑みを浮かべる。森さんは雨宮くんに言い返すために、賢明にから揚げを咀嚼する。

「傍から見ればラブラブ？」

「だよなー」

「はあ！？」

桜木さんと泉くんのツッコミに、雨宮くんと森さんは慌てて体を回した。森さんはから揚げでいっぱい、まだ口を開けない。

「ああ、最近仲が良くなったんだと思っていたけど。へえ」

冷たい空気は、鳥野くんから発せられているものだ。

「な！ 誤解だ！ 鳥くん！ 誰がこんな奴！」

「こんな奴とは何ですか、失礼な！」

から揚げを飲み下した森さんが抗議する。

「お前はややこしい突っ込みをいれるなよ！」

「わたしは鳥野くんに妬いていただいて嬉しいです！」

「誰も聞いてねえっての！」

「うるさい、二人とも」

冷えた鳥野くんの声に、森さんと雨宮くんは、「はい」と大人しく俯いた。

森さんの、鳥野くんにヤキモチ妬いてもらおう作戦は、一応成功したようだったが、怒られるだけで楽しくないわと思った森さんは少し反省しながら味噌汁をすすった。

「鳥野くん。大好きです」

「ああ、そうですか」

そっけなく鳥野くんは返しながら、森さんのお皿からから揚げを一つ取り上げたのだった。

チキンナゲットを前に、五十嵐さんは今年一番の難しい顔を作っていた。

この状況がうまく理解できないでいるせいだ。

「食べないの？」

目の前では知らない男がにこにこことハンバーガーを頬張っている。

何故だ、と五十嵐さんは自身に問いただす。この状況が果てしなく理解しがたい。

夕方のファーストフード店は学生達で賑わっていた。学校から駅までの道沿いということもあって、見覚えのある学生もちらほら見かけられる。目の前の男も、そういう意味では見覚えはあった。同じ学年ではあったはずだ。名前は知らない。

「なんなんだ、お前は」

五十嵐さんは心情を素直に吐露した。もともと、隠し事や建前は苦手な性分である。

「あ、そうか。五十嵐さんは有名だから、俺だけ一方的に知り合いなつもりになってたよ」

ごめんごめん、と言いながら、彼は二年二組の千草です、と名乗った。

「で、何の用？」

五十嵐さんは警戒心もあらわに千草くんを睨みつけた。そうしている間にも、チキンナゲットは冷めていく。

「実は好きな女の子がいるんだけど」

「……」

唐突な台詞に、五十嵐さんは我が耳を疑った。新手の冗談にしては、笑いどころが分からない。

「告白しようと思ってるんだけど、女の子は好きって言われたら嬉しいもの？」

「な……」

五十嵐さんは鼻白んだ。「なぜわたしにそんなことを聞く」

当然の疑問だ。

「女の子の意見を聞きたくて」

千草くんは真面目な顔だが、口の端にケチャップがついている。「そこへ、五十嵐さんが来たから」

つまり、たまたま小腹が空いて寄り道をしたことが五十嵐さんの運のつきだったらしい。

五十嵐さんはため息を吐いて、冷めかけたチキンナゲットを口に運んだ。食べきってしまったら、立ち上がる口実ができる。話を聞くつもりなんかないと突っぱねても良かったが、千草くんの邪気のない口の端のケチャップを見ているとそんな気も削がれてしまった。

「嬉しいんじゃないのか？」

五十嵐さんはぞんざいに答えた。いかんせん、話題が恥ずかしすぎて直視できない。

「たとえば、相手が好きな人じゃなくても、だよ？ 迷惑にならない？」

「ならんだろう。そんな」

「告白の後は？ やっぱりもう友だちでもいられないものなのかな」

「まあ、多少きまらずいかもしれんが、相手によるんじゃないのか」

「ほっかー」

こもった声に五十嵐さんが視線を向けると、千草くんはハンバーガーを頬張っているところだった。真面目に話をするつもりがあるのか、すべて冗談なのか、よく分からない。

「告白ってやっぱりゴールなのかな」

大きな一口を咀嚼した千草くんがぼつりと口にした。

「ゴール？」

「駄目だったら、ゲームオーバで終わっちゃうのかな。ああそうか、俺はそれが嫌なのかも」

千草くんは言いながら気がついたように呟いた。

「じゃあ、告白はしないのか？」

ためらいながら、五十嵐さんは尋ねた。

「どうかな」

千草くんは残りのハンバーガーを口に押し込んだ。頬がいっぱい膨らんで、ハムスターのようである。

「嬉しいと思う」

先ほどぞんざいに答えた台詞を、今度は心から言いなおした。五十嵐さんは席を立つ。「それで、一生、忘れないと思う」

言いながら、残っていたチキンナゲットを千草くんのほうへ押しやった。

頬がぱんぱんだった千草くんは、お礼も言えずに、目を瞬いた。そんな千草くんが可笑しくて、五十嵐さんは笑う。先ほどの自分の台詞の恥ずかしさを誤魔化すように、「まあ頑張れ」となるべく心を込めずに励ました。

## 不機嫌（五十嵐さんと泉くん）

---

五十嵐さんは機嫌が悪かった。

寝坊をして朝食を抜いていたし、信号は赤にばかり当たったし、英語の宿題も忘れていた。

「よっ、めずらしいな。五十嵐が宿題忘れるとか」

こういう時に限って絡んでくるのが泉くんである。

「うるさいな」

五十嵐さんは容赦なく不機嫌な眼を向ける。こういう時に、遠慮なく不機嫌を見せられるのが、泉くんの愛すべき資質なのだが、不機嫌な五十嵐さんにはそれすらも腹立たしかった。

「おやおや。機嫌が悪いのも珍しいな。腹減ってんだろ。チョコでも食うか？」

凶星なところがまた悔しい。

「いらん。余計な世話だ」

差し出されたチョコレートの箱を、五十嵐さんは冷たく押しやった。

「五十嵐はチョコっつーより煎餅が似合うよな」

隣りから男子生徒がちゃちゃを入れてきた。

「ん？ ああ、甘い物嫌いだったっけ？」

「なんっつーか、洋物より和物なイメージ？ 弓道部だからかな」

「はいはい！ 分かる分かる。ウェディングドレスより白無垢、みたいな」

「ああ、そうよねえ。家で着物で生活してますって言われても違和感ないわー」

周りにいた女子生徒も加わって、会話は賑やかに広がっていく。

五十嵐さんは曖昧に笑って、立ち上がった。

「あれ？ 自習中だぞー、五十嵐」

教室を出ようとする五十嵐さんに、泉くんが声をかけた。

「特に課題もないし、いいだろう？ 道場で弓でも引いてくる」

きゃー格好いい、という女子生徒たちにちょっと困ったような笑みを送って、五十嵐さんは教室を後にした。

いつもはたくさんの部員で賑わっている道場も、今はしんと静まっていた。グラウンドから、体育の授業をしている生徒たちの声がわずかに届く。さやさやと、道場脇の雑木林が風と光と遊んでいた。薄い靴下に、道場の床は冷たい。面倒なので袴には着替えず、服の上から胸当てをした。

弓に弦を張り、矢を四本握りこみ、的前に立つ。すっと自然に背筋が伸びた。冷たい空気が腹の底まで染みとおる。

四本の矢を的に放った頃には、五十嵐さんの心も道場に張られた空気のように、静かに落ち着いていた。

「ひゅー。さっすが」

拍手に振り向けば、いつの間にか道場の入り口に泉くんが立っていた。

「弓道では、的に当たっても拍手はしないんだ」

「へえ。何で？」

言いながら、泉くんは靴を脱いでずかずかと道場に上がりこむ。

「何でって……何でもだ、そんなの。おい、誰が上がっていいと言った。部外者だろうが」

陰のある声で口を尖らせる五十嵐さんに、まあまあと泉くんはしまりのない笑みで手を振った

。

「いや、五十嵐が怒ったんじゃないかなあってちょっと気になって」

「今まさに怒っているんだが」

言いながら、五十嵐さんは泉くんが何を指して怒っていると言ったのか、ちゃんと分かっていた。

「お互いモテると辛いよなー」

「お前と一緒にするな」

五十嵐さんは泉くんを軽く睨んでから、観念したように息を吐いた。

「別に、怒ってはいない。ただ、機嫌が悪かったから、色々と人の印象を決め付けられてちょっとむっとしてしまったかもしれんが。それだけのことだ。悪意のないことに、腹を立てるわたしのほうが狭量だっただけだ」

「まあ、今日くらいのこと、大したことじゃないけどさ」珍しそうに道場内を見回しながら、泉くんが言った。「悪意がないから、好意だから、って全部許すことはないと思うけどな。嫌なことは嫌だと示さないと、五十嵐みたいに笑ってたら、相手にも伝わらないよ。それって逆に、相手を突き放してるんじゃないかな。お前には分かってもらわなくていい、っていう諦めっていうか」

「それは言いすぎだ」

「そうそう。そういう風にさ、他の奴にもちゃんと突っ込めばいいのにつて。言い方さえ気をつければ、わりと傷つかないもんだよ？ 余計な世話だけど」

笑いながら言う泉くんに言い返せなくて、五十嵐さんは悔しそうに唇を噛んだ。

「チョコ、食べる？」

やさしい笑みで、泉くんがチョコの箱を差し出す。

「道場内は飲食禁止だ」

五十嵐さんの凜とした声が、澄んだ空気に綺麗に響いた。

## サンタさんがやってくる

---

「ねえねえ、鳥野くんはいくつの頃までサンタさんを信じていましたか？」

にこにこ尋ねた森さんの口を、

「ストップ！」

と泉くんが素早く手で覆った。

べし、とすぐさま鳥野くんがノートを泉くんの顔面に飛ばす。

「くっ、痛い……しかし、駄目だぞ森さん。純真な子供の夢を壊すようなことを言っては！」

「え、純真な子供、ですか？」

森さんはその純真な子供とやらを探すためにきょろきょろと周りを見渡した。

放課後の教室に、残っているのは見慣れた面々。鳥野くんに泉くん、桜木さんに、隣のクラスから千草くんが遊びにきている。

「……えーと？」

森さんは問うように首を傾げた。

「だから、」と泉くんは森さんの肩を抱いて、内緒話をするように告げた。「桜ちゃんだってば。あの子はまだ、サンタさんを信じてるんだから！」

今度飛んできたノートは二冊だった。

一方は鳥野くん。もう一方は桜木さんだ。

「全部聞こえてるし！ もう、そんな子供じゃないわよ！」

桜木さんは当然のごとくご立腹である。

「まあまあ桜ちゃん。冗談冗談。クリスマスジョークだよ。ほら笑ってー」

「どこも可笑しくないのに笑えません」

そんな二人に、森さんは小さく笑いながら、クリスマスかぁと呟いた。

「あの！ 森ちゃんはクリスマスって何か予定とかある？」

大胆に訊いたのは千草くんだ。

「予定、ですか？ そうですね」

ちらっ、ちらっ、と森さんは鳥野くんに視線を送った。

「ないよ。まったく何も」

しらっと答えた鳥野くんに森さんはショックを隠さずに、肩を掴んで揺さぶった。

「ないわけじゃないじゃないですか！ 一大イベントですのに！」

「えーと、俺は森ちゃんに訊いたんだけど……」

残念ながら、森さんは鳥野くんの発言を取り消してもらうことに必死で、千草くんの話は眼中から消え去っていた。

「何だ鳥野。暇してんの？ じゃあさ、みんなでクリスマスパーティとかしようぜ。ケーキ買っ



てさ。食べ物とか持ち寄って。あ、プレゼント交換とか！」

泉くんがわくわくと提案する。

「いや、やっぱり忙しいや。無理」

「鳥野、お前……………」

「そうですよね、忙しいですよね。あ、面倒そうな顔をしないでください！」

「賑やかで楽しいね、一組は」

「うんうん。みんなお子様よね」

窓の外ではさりげなく雪が降り始めていたのだが、気づいてもらえるのには、もうしばらく時間がかかりそうだった。

## マフラー（森さんと鳥野くん）

---

森さんは鳥野くんの家の居間でマフラーを編んでいた。

ソファに二人、並んで座っている。暖房の効いた室内で、窓ガラスは曇っていた。鳥野くんが本を読んでいる横で、森さんはせっせと編み棒を動かしている。

「ふふふ。鳥野くんったら、幸せ者ですね。可愛い恋人から手編みのマフラーをプレゼントされるなんて」

「それ、自分で言う？　　というか、プレゼントなら普通、目の前で編まないよね」

鳥野くんは呆れたように言った。「すごい編み目」二十センチほどの長さになったマフラー未満のそれを、手に取って感心したように言う。

「見ないでください。まだ未完成なのですから！」

「また無理な注文を」

「紅茶が飲みたいです」

「はいはい。まったく」

仕方なく鳥野くんは立ち上がった。後ろのキッチンへ移動する。

やかんを火にかけたところで、「鳥野くん」と森さんが呼びかけた。

「すごい編み目でも、鳥野くんはわたしの編んだマフラーを喜んでくれますよね？」

多少心配になったものらしい。

「さあ、どうかな」

鳥野くんは適当に答えた。

「愛情を込めます」

「怨念の間違いじゃなく？」

失礼な、と森さんの声が怒る。振り返らなくても、頬を膨らませている森さんの表情が浮かんで、鳥野くんは声を出さずに笑った。

「いいのです。わかっていますから。内心では大喜びなのに、照れているのですね、鳥野くんは」

「いつも不思議なんだけど、どこからくるの、その自信は」

棚に紅茶の缶を探しながら、鳥野くんが言った。缶は二つ見つかった。一つはもうわずかでなくなりそうだ。もう一つのほうは新品である。

「自信ではなく、信頼です」

「よく分からないけど。森さんは自分のこと大好きだよ」

時々ついていけないほどの自信も、そこからきているのでは、と推察しながら鳥野くんが言った。

「まあ、嫌いではありませんけれど。そういう鳥野くんは鳥野くんのことがお嫌いですよ」

思わぬ反撃に、鳥野くんは咄嗟に言葉を失った。

「けれども心配ありません。鳥野くんがいくら鳥野くんのことをお嫌いでも、わたしがその分ま

で大好きですから」

ね、と微笑む森さんに、しかめ面を返そうとして鳥野くんは失敗した。

「何なのその論理」

悔し紛れに憎まれ口は叩いておく。

「ふふふ。鳥野くんってば、本当に幸せ者なのですから」

「あーはいはい。そうかもしれませんね」

やかんが沸騰を告げる。鳥野くんは火を止めて、新しい紅茶の缶を開けた。わたしって幸せ者です、と森さんに言わせたい気持ちがあったことは否定できない。

## たとえばの話（森さんと鳥野くん）

---

森さんと鳥野くんは並んで帰りの道をたどっていた。

早い日暮れはすでに夜を呼び、我先にと星が輝き始めている。

「あ、流れ星」

森さんが毛糸の指で上空を示した。

立ち止まった森さんに対して、鳥野くんは無反応に歩を進めて先に行く。

待ってください、と森さんは慌ててその背中を追いかけた。

「分かりやすい嘘でも、もっと面白いものにしてよ」

鳥野くんが追いついた森さんに注文をつける。森さんはちょっと口を尖らせてからすぐに引込めて、マフラーに顎を埋めると、ふうむと思慮深げな声を洩らした。

「わたしは実は月からやってきたお姫さまで、今夜、月へ帰らなければならないのです。引き止めてくださいますか？」

「うわ」

引き止めるどころか、引いた声で鳥野くんは足を速める。

「乗ってくださらないとわたしが恥ずかしいではないですか」

小走りで森さんが追いつくと、鳥野くんの歩調は少し緩んだ。

「そういうことは泉あたりとやりなよ。喜んで付き合ってくれるだろう」

「つれない王子様ですね。鳥野くんはきっと、わたしがガラスの靴を落としても、探しにきてはくれない気がします」

「森さんなら俺が探さなくても、自分で名乗り出そうだよね」

「毒リンゴを食べて眠りについてしまったら？」

「寝ていたほうが静かで良いかも」

「まあ」

さすがに森さんはむくれて、大股ですたすたと歩き出した。マフラーで口元を隠し、息だけで鳥野くんが笑う。

「あ、流れ星」

鳥野くんは先に行く森さんの背中に声をかけた。

「え」

森さんは立ち止まって夜空を仰ぐ。

その間に鳥野くんは森さんの隣りに追いついて、彼女の仰いだ額を手の平で叩いた。

「嘘だよ」

はっとして悔しがる森さんに、鳥野くんは唇を曲げた。手を差し出すと、しゅしゅと機嫌を直した森さんが手袋の手を重ねる。それでもまだ顔をそむける森さんに、

「さて、どこからどこまでが嘘だったでしょうか」

鳥野くんは問いかけた。

「え」ぱっと森さんが鳥野くんを振り向く。「どこからどこまでって、それは……………」

答えを期待する瞳で、森さんが鳥野くんを見上げる。

「寒いし早く帰ろう」

鳥野くんは森さんの手を引くように足を速めた。

「照れていますか鳥野くん」

「知らないよ」

耳が赤いと言われたら寒いせいだと言おうと、鳥野くんはこっそり胸の内に台詞を用意したのだった。

## 二者択一（雨宮くん）

---

図書室で雨宮くんは鳥野くんを見つけた。

「あ」

すぐに近づこうとした雨宮くんだけれど、鳥野くんの向かいに森さんが座っているのも同時に確認して歩が止まる。最近の森さんは嫌がらせ的に構ってくるので非常にやっかいだ。はっきりいって面倒くさい。

それでも森さんだけがいる状態ならば、冷たくあしらえば良いだけだ。しかし鳥野くんが間にいるとなると、事情は複雑になる。森さんが雨宮くんを構うだけで鳥野くんの機嫌は悪くなるし、明らかにそれは雨宮くんの好感度の低下につながるだろう。

けれども、それで鳥野くんから遠ざかるのも、森さんの思惑通りのようで面白くない。それに、これ以上嫌われようがないじゃないか、と雨宮くんは大きく一步を踏み出した。

だが待て、と雨宮くんは再び足を止める。

このまま雨宮くんが鳥野くんと森さんの間に割り込めば、当然森さんと口論になるだろう。森さんが雨宮くんの登場に黙っているとは思えないし、雨宮くんも森さんに嫌味の一つも言わずにいられる自信はない。そうして騒げば、迷惑をするのは結局鳥野くんだ。それは雨宮くんとても本意ではない。

見なかったことにすべきか、と雨宮くんはくるりと背を返した。

だがしかし、見てしまったものは事実なのだ。このまま雨宮くんが立ち去れば、二人は何事もなかったかのように、下校時間に仲良く一緒に帰ることだろう。もしかしたら手などつないで帰るのかもしれない。森さんの能天気な幸せそうな顔が目には浮かぶようだ。非常に腹が立つ。

やはり邪魔をして、無理矢理自分も一緒に帰ろうと、再び二人のほうへ体を向けた。

でもやはり鳥野くんに迷惑が、と立ち止まる。

いやいや森さんを喜ばせるわけには、と足を踏み出す。

それでもやはり、と踏み出した足を引っ込める。

「だんだん馬鹿馬鹿しくなってきたな……。冷静になれ、俺……」

周囲のちらちらとした視線にはっとした雨宮くんは、額を押さえて自嘲した。改めて状況を考える。鳥野くんに迷惑はかけたくない。そして、森さんだけに良い思いをさせるのは不愉快だ。

「これだ」

そして、雨宮くんは一つの結論を導き出すと、すたすたと二人のいる机のほうへ歩き出した。

「森さん」

と、鳥野くんではなく森さんへ声をかける。

「あら。何ですか、雨宮くん」

森さんは自分へ声をかけられたことに少し驚いたようだった。鳥野くんがちらりと顔を上げる。

「一緒に帰ろう。トリくん、うるさいこいつは俺が連れて行ってあげるから、静かに読書ができるよ」

にこりと誇らしげに雨宮くんは鳥野くんに笑いかけ、戸惑う森さんを強引に引きずっていった。

「ちょっと、どういうことですか」

意表をつかれたらしい森さんの慌てた声に、雨宮くんはガッツポーズでも作りたい気分で楽しそうに笑った。

## どきどき（千草くんと森さん）

---

千草くんは訪れたチャンスに動揺を隠せなかった。

放課後の教室。

夕暮れに森さんと二人きりである。

「ごめんなさい、千草くん。うちのクラスではないのに手伝わせてしまって」

「ううん。どうせ早く帰ったって暇だし」

クラス委員の仕事で、森さんと千草くんはアンケートの集計をしていた。内容は、来年の修学旅行の行き先についてである。

「こんな日に風邪を引いてお休みの泉くんには、あとでよーく千草くんにお礼を言うように伝えておきますね」

泉くんはもう一人のクラス委員である。

「はは。それにしても、泉くんも風邪を引いたりするんだね」

失礼なことを言って笑いながら、千草くんは心の中で泉くんにお礼を言っていた。風邪を引いてくれてありがとう泉くん！

「大体、北海道か沖縄ですね。すぐに終わりそうです。良かった」

「そうだね」

頷きながら、アンケート用紙を仕分けする手を若干ゆっくりにした千草くんである。もっと自由な発想を持てよみんな！ と自分も沖縄と答えたことは棚に上げて、心中で秘かに叫んだ千草くんである。

そっと千草くんは森さんの姿を目で追った。

アンケートを仕分けする細い指。紙で指を切ったら素早く手当てをしようと、いけないことを考える。けれども鞆に絆創膏など入っていないな、と思考が及ぶ。むしろ森さんのほうが持っていそうだ。それなら自分が指を切って森さんに手当てをしてもらおうか、とさらにいけないことを考えた。

長い髪が、肩から胸へと落ちている。触れてみたいな、と思った。髪にゴミが、というのはベタだろうか。髪に虫が、と言ってもしかして抱きつかれたり、というのは姉の少女漫画の読みすぎかもしれない。

伏せた睫毛は人形のように綺麗だ。目を上げて、こちらを見てくれないかな、と思う。笑顔を向けてくれたら最高だ。話しかければよいのだけれど、気の利いた話題が浮かばない。つまらない話をして幻滅されてしまうのは嫌だ。

「好きだなあ」

思わず、言葉が唇から滑り落ちた。



「え？」

森さんが瞳を上げる。向けてきたのはきょとんとした顔だ。

「あ」

千草くんは射すくめられたように体を強張らせる。

ごまかすのは簡単だった。プリンが、とか、パンダが、とか、適当に後に言葉が続けばよい

。

それとも、これはチャンスかもしれない。いっそのこと伝えてしまえば。

「え、えへ」

結局、どちらとも決められず、千草くんは笑ってごまかした。内心では、何やってるの、俺！

とどっちつかずな自分に非難ごうごうである。

「ふふふ」

つられたように、森さんも笑う。

「えへへへ」

重ねて千草くんも笑う。まだこの幸せを手放せる勇気は持てなくて。でも、それでもいいんじゃないかとも思ったり。

もしかして、伝わってしまったかな、という小さなどきどきは隠すのが今までより少し、難しそうだった。

## 彼女がほしい？（泉くん）

---

泉くんはいつものように呻いていた。

「あー、彼女がほしいー」

机の上につぶせてだらりと腕を伸ばしている。手には先ほど授業を終えたばかりの数学の教科書が握られていた。

「あはは、泉はそればかりね」

隣の席の女子生徒が教科書を机にしまいながら軽く笑いとばした。

「いいじゃん。健全な証拠だろう？ 花丘は彼氏ほしいとか思わないの？」

つぶせたまま顔だけを隣に回し、泉くんは花丘さんに問うた。

「ほしいかと問われればほしいけど」花丘さんは頬に落ちた髪を耳にかけた。横目で泉くんを見る。「じゃあ、付き合ってみる？」

「え？」

間の抜けた声が泉くんの口から漏れた。持っていた数学の教科書が手からすべり落ちる。

「冗談よ。ただ、泉なら気を使わないし話していて楽しいし、何ていうか友達の延長でそういうのもありかなってちょっと思っただけで」

早口で花丘さんは言うと、泉くんから視線を逸らした。

「はあ」

のっそりと体を起こし、泉くんは癖のついてしまった前髪を引っ張る。花丘さんの横顔を見つめた。その脇を、「りんりんー」と桜木さんが森さん呼びながら通り過ぎる。数学の教科書を胸に抱いている。わからなかったところを、森さんに尋ねるつもりなのだろう。俺だって教えられるのにな、と思いながら泉くんは桜木さんの背中を見送った。

「ねえ、冗談なんだからね！ 笑うか突っ込むかしてくれないと恥ずかしいじゃないの」

花丘さんが少し赤くなった顔で泉くんを睨む。

「え、ああ。いや、なるほどな。友達の延長かあ」

「何を納得してるのよ。別に、普通でしょう？ ためしに付き合ってみて、そこから好きになっていったって良いわけだし」

「それもそうかー」

「彼女がほしいって、そういう意味じゃなかったの？」

反応の鈍い泉くんにひとつため息を吐いて、花丘さんは熱くなった頬を冷ますように手のひらをあてがった。

「そっか。ああ、うん。そうだったかもしれない」

自分を振り返って、泉くんは頷いた。以前の自分ならば、確かにそうだ。彼女がほしいという時に、誰の顔も浮かばなかった自分ならば。

「数学の教科書、落ちてるわよ」

花丘さんが言った。

「うん」 泉くんは席を立てそれを拾い上げながら、花丘さんに向かって困ったように微笑んだ。「俺、花丘とは付き合えないや」

「冗談だって言ってるのに」

花丘さんはぷいとそっぽを向いてしまう。

「ごめん」

「冗談で返してよ、もう。空気読め」

泉くんは再び席につく。前のほうの席で、桜木さんが森さんと笑っていた。今度、数学は得意科目だと桜木さんに言ってみよう、と泉くんはひそかに決意したのだった。

## 好きでいてもいいでしょうか（桜木さん）

---

数学の教科書を机の上に出す。

時計を見上げる。

始業まであと三十秒。

前髪を整えて、背筋をのばす。

視線は教室の前のドアに固定されている。

チャイムが鳴る。

同時にドアが開く。

武藤先生はいつも時間にぴったりだ。遅れることなどまずありえないし、早く来すぎることもない。先生を分解したら数字になるんじゃないかしら、などと森さんは冗談交じりに言っていたが、もし分解されたら7の数字がほしいな、と桜木さんはひそかに思っている。武藤先生が一番好きな数字は7なのだと言っていたのが印象的だったのだ。

今日は濃いブラウンのシャツだ。ぴしっとアイロンのかかった襟を見ると武藤先生らしいと嬉しくなる反面、どうかご自分でアイロンをかけていますように、とこっそり祈っている桜木さんである。

号令がかかって礼を終えると、前回のページを確認し、授業を始める。あまり張らない声だけれど、よく響いた。黒板に教科書の問題を写す。角ばった細身の文字だ。問題を解く時間が与えられた。

みなが頭を机に向け、問題に取り組み始める中を、武藤先生がゆっくり歩く。一人頭を上げて武藤先生を見つめていた桜木さんは、目が合いそうになって慌てて顔を下げた。武藤先生がすぐ隣を通る。桜木さんは息を止めていた。

武藤先生は時計を見上げて、教壇へ戻る。

「問1から、答えの解った者は手を上げて黒板に書いてください」

何人かの生徒の手が上がる。

武藤先生に指名された生徒が一人、二人と前を出て板書を始めた。桜木さんも手を上げて武藤先生に名前を呼ばれたかったけれど、残念ながら問題が解けなかったのもそれは叶わなかった。どうしてわたしの苦手科目は数学なんだろう、といつも桜木さんは悲しくなる。こんなに好きなのに、と心の中でつぶやいて、一人きり、と頬に手を当てる桜木さんである。

武藤先生は腕を組んで板書する生徒の答えをすかさずに見つめている。授業中は堂々と武藤先生を見つめられるので、もっと数学の時間が増えたらいいのに、と桜木さんは思っている。しかし、来年の選択は文系を希望した。冷静なところではしっかり現実的な自分に少し安堵して、少し幻滅した。来年はこうして武藤先生の授業を受けることもないだろう。会う機会はぐんと減ってしまう。

板書が終わり、前に出ていた生徒たちが席へと戻る。武藤先生は赤いチョークで解説を始めた。その姿がじわりと滲む。桜木さんは手の甲で目をこすった。

つん、と背中をつつかれて振り返った。泉くんだ。

「なに？」

「えっと」歯切れ悪く、泉くんが目を泳がせる。

「桜木さん、授業中は前を向くように」

武藤先生の声が飛んだ。

思わず桜木さんは立ち上がる。

「は、はい！ いつも見つめてます！」

咄嗟に答えて、はっとした桜木さんは赤くなる。

「はい。余所見はしないように」

武藤先生は口の端をわずかに上げて息を吐いた。

「すみません」

桜木さんは席につく。耳まで火照りながら、先ほどの武藤先生の声と笑みをしっかりと脳裏に焼き付けた。

## かわいいもの（五十嵐さん）

---

五十嵐さんは手袋を買いにきていた。

ショッピングはあまり好きではない。選ぶのに疲れてしまうのだ。そうして気が進まずに足が遠のいているうちに、冬も半ばを過ぎてしまった。このまま春まで、とも思ったが、さすがに指先が冷たいので一念発起した次第である。

「えーと、」

目移りしながら、シンプルなデザインのものに手が伸びる。色のはっきりしたものや、装飾のついたものは好みではない。あとは予算との折り合いだ。

いくつかめぼしいものを手にとって眺めていた五十嵐さんだったが、少し変わった手袋がひょいとその目に入った。ミトンタイプの手袋で、手の甲には猫の顔の編みこみがしてあり、三角の耳がふたつ、ぴよこんとついている。手のひら側は肉球を模した編みこみがしてあった。

「へえ、いろんなのがあるんだな」

面白いな、と感心して見ていただけだったが、

「五十嵐さんが！ 可愛い手袋を！」

と後ろから小さく叫ぶように言われてしまった。驚いて振り向けば、由ちゃんと結ちゃんだ。

「いや、これは別に、見てただけで」

恥ずかしくなった五十嵐さんは猫の手袋をあった場所へ戻そうとする。けれども、がしっと両側から由ちゃんと結ちゃんに手をつかまれてしまった。息の合った連係プレイだ。

「すごく五十嵐さんに似合うと思うの！」

「ギャップが良いと思うの！」

なにやらふたりの瞳が眩しく輝いている。

「ええと、本当に見てただけで。こういうのは可愛すぎて趣味じゃないし」

少し困ったように五十嵐さんは眉を下げた。

「そうなの？」

「本当に好きじゃないなら、仕方ないけど」

ふたりはしょんぼりと五十嵐さんから手を離した。

「それに、わたしには似合わないでしょう？ こんな可愛いもの」

自分の印象はわきまえているつもりだった。そこに猫の手袋の入る余地はない。

「そんなことないよ」

「むしろ可愛い」

ふたりは熱心に否定した。

「でも、実際、可愛いものは趣味じゃないんだ」

「それなら、」

「仕方ないけど」

あからさまに肩を落とすふたりに苦笑して、猫の手袋を戻した五十嵐さんは目をつけていた白い手袋に手を伸ばした。どこにでもあるデザインだが、手ごろな値段で、大体五十嵐さんの求めていたものと一致する。

「……」

しかし、手にとる寸前で五十嵐さんはふっととどまった。それから、気を変えたように、戻したばかりの猫の手袋を手取る。右手にそれを通してみた。

「似合う？」

ぱくぱくと手を開いて閉じて、由ちゃんと結ちゃんに尋ねる。

「うん！」

「とっても！　すごく！」

ふたりは拳を握って、大きく頷いた。五十嵐さんは小さく笑う。

「じゃあ、これにしようかな」

手袋をはずしながら五十嵐さんが言った。

「え、でも趣味じゃないって」

「わたしたちがうるさく言ったから？」

気遣う顔になるふたりに、五十嵐さんは悪戯めいてほほえんだ。

「たまには、趣味じゃないものを身につけてみるのもいいかと思って」

由ちゃんと結ちゃんの顔がぱっと花の咲いたように輝く。

「五十嵐さん！」

「素敵！」

大げさだな、と五十嵐さんは苦笑して、レジへと足を向けた。

「五十嵐さん、わたしたちこの後、ケーキの食べ放題に行くんだけど」

「一緒に行かない？」

ケーキを食べ放題食べたいなどと、五十嵐さんは考えたこともない。甘いものは嫌いではないけれど、一個で充分だと思っている。

「……行ってみようかな。そんなに食べられるとは思えないけど」

「やった！」

「お店の外で待ってるね」

喜ぶふたりに背を向けてレジへと急ぐ五十嵐さんの足取りは軽かった。スキップをしたいと思ったけれど、それは思うだけにとどめておいた。

## 雪の日（森さんと雨宮くん）

---

ざくりざくりと、踏みしめられるくらいの積雪になっていた。

雪はまだしんと降りつづき、世界に白の面積を広げている。

森さんは赤い傘をくるりと回し、白くなることを拒むように雪を払った。赤い長ぐつではっきりと足跡をつけて歩く。公園の横を半分通り過ぎて、足を止めた。瞳を一度宙に上げ、まっすぐに後ろへ数歩戻る。公園のフェンスの向こうにある後ろ頭に見覚えがあった。

「雨宮くん」

呼びかけてみる。

けれども、雪の中、ベンチに座っている雨宮くんは振り返らなかった。

「雨宮くん」

もう一度呼んでみる。

空気の音を吸っていく降りしきる雪の中、森さんの声は唯一存在する音のようにずっと響いた。

けれども雨宮くんは肩をぴくりともさせない。

森さんは傘を首と肩ではさむと、おもむろに屈んで足元の雪を団子に丸めた。そのままひょいとフェンスを跳び越すように投げる。狙いはあやまたず、雪玉は雨宮くんの頭に命中した。

「なにするんだよ！」

雨宮くんは素早く立ち上がって振り返る。

「あら。生きてましたね。凍死しているのではないかと」

「無視してるのが伝わらなくて残念だよ」

雨宮くんは髪のを雪を払いながら、憮然として言った。肩に積もっていた雪もついでに払う。

「こんな雪の日に傘も差さずにベンチでぼんやり座っているなんて怖い人ですよ。雪だるまになりたいのでしたら止めませんけど」

「別に。そんなんじゃない」

「わたし、これから鳥野くんの家へ遊びにゆくのです」

「聞いてないし」

「わたしはとても幸せです」

「ああそうですか」

「埋まりたいと思っていたことが、わたしにもありました」

「何、唐突に」

「世界から隠されたいと、思っていたことが、わたしにもありました」

「なにそれ」

「けれども、埋まっても、隠れていても、鳥野くんは探しにきてはくれないのです」



「まあ、鳥くんは、そうだろうね」

「ええ。でも、わたしが行くのを待っていてくださるのです。だから、わたしが行かなければ駄目なのです。埋まっている暇も、隠れている暇もないのです」

「説教でもしているつもり？」

「惚気ています」

「やな奴」

顔をしかめた雨宮くんに、にこりと森さんはほほえんだ。

雨宮くんはフェンスをつかむと、勢いをつけてひょいと飛び越える。

「傘には入れてさしあげませんよ？」

肩をすくめて森さんは先に立って歩き出す。

「頼んでないよ」

雨宮くんは森さんの足跡を踏みつける。大股でずんずんと歩いて、追い越すと、まだまっさらな地面に力強く足跡を刻みつけた。

## 雪の日2（泉くんと桜木さん）

---

泉くんは道の真ん中で両手を高くかかげて叫んだ。

「雪だー！」

降る雪を光のように泉くんは全身であびる。

「若者は元気よのう」

後ろから傘をさして歩きながら、桜木さんがやれやれと首を振った。

「なに大人ぶっちゃって。雪合戦とかしようぜ？」

うきうきと泉くんは素手で雪玉をかためる。

「それを投げてきたら絶交する」

「ひどい！」

今まさに雪玉を投げようと振りかぶったまま、泉くんは静止した。

「ピンポンして出てきた瞬間に鳥野くんにぶつけよう」

「ほんとにひどいな桜木さん！」

ほほほ、と笑って桜木さんは傘を回しながら泉くんを追い抜く。

泉くんは雪玉を後ろに放り投げて、桜木さんの小さな足跡に並んだ。桜木さんの二歩分を、一歩でまたぐ。

こっちよ、と桜木さんは鳥野くんの家のほうへ角を曲がった。

「ねえ、桜ちゃんは どうして鳥野くんの家を知ってるの？」

聞きあぐねていたことを、角を曲がった勢いで泉くんは尋ねた。

「りんりんと一緒に遊びにいったことがあるからだけど」

「へえ」

「泉くんは鳥野くんの家に行ったことなかったんだ」

「桜ちゃんもうちに遊びにきてよ」

「話が飛びましたよ泉くん」

「あ、鳥野くんの家まで、雪だるまを作っていこうよ」

「話をそらしたでしょう」

まあまあ、と泉くんは笑ってごまかして、屈んで雪を丸めると転がし始めた。

「俺は頭を担当するから、桜ちゃんは胴体ね」

「普通逆じゃないの？」

「ほら、胴体は多少でこぼこでもいいけど、頭はきれいに丸いほうが格好いいし」

「こら、どういう意味？」

あはは、と泉くんは再び笑ってごまかした。

「もう、先に行くからね」

先ほどよりも大股に、桜木さんは先に立って歩き出した。

「待ってよ、桜ちゃん」

泉くんは桜木さんの足跡を消すように雪玉を転がしながら続く。桜木さんが時々確認するようにちらりと振り向いてくれることを知っていたので、意識的に歩幅を小さくして、泉くんは足を進めたのだった。

## 雪の日3（鳥野くん）

---

鳥野くんはあたたかくした部屋の中で本を読んでいた。

窓の外は雪。

読書にはおあつらえ向きの静けさだ。

本のページを繰る音が心地よい。

薄明るい光に部屋は満ちていた。淹れたばかりのコーヒーの香りがかすかに漂っている。

キリの良いところまで読んで、鳥野くんは顔を上げた。

雪の白が目には痛い。

「よく降るな」

しんしんと降り続く雪に、鳥野くんはぼつりと洩らした。

時計を見上げる。

昼食のことを少しだけ考えた。

傍らに置いておいた携帯電話が着信を知らせて光っているのに気がついた。チェックをすると、森さんからのメールだ。

『みんなで遊びにゆきますね』

「なにを勝手に」

鳥野くんはため息をついた。

「しかもみんなって」

いくつかの顔を鳥野くんは思い浮かべた。来るなら一人で、と返信しようとしてとどまった。森さんが喜ぶ様子が目に浮かんだからだ。

メールの送信された時刻を見ると、十五分ほど前だった。早ければそろそろ来るころかもしれない。

インスタントラーメンならば五人分あるなと思い浮かべて自己嫌悪に陥った。

「やさしくするなんて、気持ちがいい」

そう思ってしまう自身に、また嫌悪が走る。

胸を撫でた。

しんしんと雪が降っている。虚ろな部屋にその白さは反射して、部屋のなかにも雪が降り積もっていくようだった。ただ、自分自身だけに雪が降らない。黒いコーヒーを飲んだせいかもしれないなかった。

本にしおりを挟んでとじる。

お湯を沸かしておくつもりだ。

立ち上がって、そういえばと再度携帯を開いた。

まだ森さんに返信をしていない。

いくつかの言葉を考えた。

やさしい言葉。いじわるな言葉。素直な言葉。ひねくれた言葉。

どれもしっくりこなくて、結局返信はせずに携帯を閉じる。

森さんは返信くらいしてくださいと怒るかもしれない。

鳥野くんは微笑みそうになって唇をつまんだ。

冷蔵庫の中の牛乳を確認する。

森さんの分くらいはココアがつかれるだろう。それできっと彼女は機嫌を直してくれるだろう

。

チャイムが鳴る。

しずかだった外から、にぎやかなおしゃべりがわずかに届いていた。

外の冷たく明るい雪を思いながら、鳥野くんは玄関へと歩いていった。

## 義理チョコ（桜木さん）

---

チョコレート湯せんにかけてぐるぐるとかき混ぜながら、わたしは魔女みたいだわ、と桜木さんは思った。

甘くて苦い香りが台所に満ちている。

灯油を売りにくるトラックが外の道路を通り過ぎていった。それがなんだか遠い世界のこのように似合わない。

前髪をとめたヘアピンを指先でいじった。新しく買ったばかりのものだ。ワンピースも、いちばんお気に入りのもの。エプロンはアイロンをあてたばかりで、使い古しのスリッパだけが少し恥ずかしい。

「馬鹿みたいかなあ」

渡す相手に見せられるわけではないのに。

少し前までなら、もっと浮かれて作れたはずだ。けれども今は、甘い気持ちよりも苦い気持ちが先に立つ。

「ええい、暗いぞ！ 惚れ薬を仕込んでやるわ、くらいの心意気で作らなくちゃ」

顔を上げ、勢いで鍋をかき混ぜていた木べらも上げると、ぱっとチョコがエプロンに飛んだ。

「あ、わわ」

慌てて指でこすって、染みを広げながら、桜木さんは瞳を伏せたのだった。

桜木さんはトイレの鏡で何度も笑顔の練習をした。

「感じよく、馬鹿っぽく、軽く」

とぶつぶつと繰り返しては笑顔を重ねていく。チャイムが鳴って、下校を促す放送がながれる。

「よし」

桜木さんはこぶしを握り、鏡の中の自分にむかって頷くと、力強い足取りでトイレのドアを出た。

武藤先生が放課後に回るコースは熟知している。

桜木さんはわりと人通りのある渡り廊下を選んだ。通り過ぎる人がいたほうが、雰囲気も軽くなるだろう、と考えてのことだ。

「それに、人目があったら、わたしも急に泣き出したりしないと思うし」

もし受け取ってもらえなくても、と胸中で付け加えて、想像しただけで瞳がうるんだ。

「いけないいけない」

首を振って、悪い想像を追い払う。

「今はただ、渡すことだけ」

後ろの階段を、何人かの生徒がおしゃべりをしながら過ぎていく。

桜木さんは深呼吸をした。

かしこから人声や足音は聞こえるものの、一瞬、人影が絶える。

「あ」

渡り廊下の突き当たりから角を曲がって、新しい人影が廊下をこちらに渡ってきた。武藤先生だ。

「武藤先生っ」

何度もシミュレーションしたとおりに、桜木さんはワントーン高い声で武藤先生に駆け寄った。チョコレートを持った手は背中に隠している。

「どうかしましたか、桜木さん。もう下校時刻ですよ」

質問なら明日に、とまじめに続く武藤先生に、桜木さんははにかんで笑う。

「先生、今日が何の日か覚えてますか？」

「今日？」

「じゃじゃーん、バレンタインデーですっ」

桜木さんは掲げるようにチョコレートを取り出した。

武藤先生は、少し困ったような顔をする。それも桜木さんには計算のうちだ。

「申し訳ないのですが、」

「可愛い生徒からの愛情じゃないですか。受け取ってください、お願いします！」

たっぷり練習した笑顔をここぞとばかりに発揮して、桜木さんは強引に武藤先生の手チョコレートを押し付けた。

何かを言おうと口を開いた武藤先生に先んじて、桜木さんが口早に続ける。

「これでひとつ、数学の成績もよろしくお願いします！」

虚を突かれたように、武藤先生は瞬き、それから仕方なさそうに苦笑した。

「成績のことはまた別ですが、こちらは受け取っておきましょう。ありがとうございます」

「ありがとうございます、先生！」

予定では大好き、とさりげなく続けるつもりだった。けれども、声が震えそうになって、「失礼します」と頭を下げることでごまかした。

逃げるようにぱたぱたと走り去る桜木さんの背に、「廊下は走らない！」と武藤先生の声がかかる。

「はい、わかっています！」

張り上げるように返事をしながら、今日ばかりは怒られても足を緩めることはできなかった。

## 初恋（泉くんと兄）

---

泉くんは健兄の部屋の前にたたずんでいた。

たまたま部屋を出ようとドアを開けた健兄が、泉くんに気づいてぎょっとする。

「なんだお前、幽霊みたいに」

「健兄」

泉くんはそわそわと瞳を動かす。

「なんだ。父さんの盆栽でも割ったのか？」

「そんなんじゃないって。ちょっと、相談が」

はっきりしない泉くんを、とりあえず健兄は部屋に招き入れた。

健兄はベッドに、泉くんは床にひざを抱えて座る。

「出かけようとしてたところなんだからな。手短にしてくれよ」

ぶっきらぼうに健兄が言うと、ひど、と洩らしながら、泉くんは少し笑った。それから、少しまじめな顔になる。

「健兄は彼女いるんだよね」

「はは一ん、振られたな？」

にやり、と健兄が笑う。

「なんでそっちに飛ぶんだよ！ まだ告白もしてないっての」

「なんだよ、片思いか」

「う」

うっかり口をすべらせたうかつさに、泉くんは耳を赤くした。

「さっさと告白しちまえよ、うだうだしてるなんて格好悪い」

さも簡単なことのように健兄が言う。

「だって、他に好きな人がいるし」

拗ねたように口を尖らせながら、泉くんがもごもごと言う。

「そいつに勝つ自信がないのか。なおさら格好悪いな」

「そんなこと」

「じゃあ、大して好きでもないんだらう？ 別の奴に持ってかれてもいいってんなら」

「そんなことない！」

泉くんが健兄をにらむ。

「で。相談って何」

「あ」

すでに答えは出されてしまった。けれどもそれを正直に言うのも悔しかったので、

「お父さんの盆栽割っちゃったんだけどどうしたらいい？」

咄嗟に嘘をついていた。



「正直に謝って怒られろ」

乱暴に泉君の頭をたたいて、健兄は部屋を出て行った。

「ちえ」

たたかれた頭をおさえながら、泉くんは自分よりも広いその背中を悔しそうに眩しそうに見送ったのだった。

## 君に伝えたい（千草くん）

---

今日も今日とて、千草くんは森さんに教科書を借りにいった。

「いつも頼りにしちゃって悪いね」

借りすぎかな、という自覚は多少あったので、迷惑じゃないかな、と気にして言うしてみる。

「いいえ。わたしが忘れたときは千草くんを頼りにさせていただきますから」

森さんは微笑んで千草くんに教科書を手渡してくれた。

「ありがとう、森ちゃん！」

「どういたしまして」

森さんがにこりと微笑む。

ああ、大好きだ、と千草くんは思った。

笑った顔も。

丁寧な話し方も。

授業が始まる。

森さんの教科書を開いた。授業は、森さんのクラスのほうが先に進んでいるらしく、開いて、と教師に言われたページにはすでに書き込みがしてあった。英語の授業だ。単語のところどころにルビのように訳が書き込まれている。筆圧の薄い、細い字だった。

ああ、好きだなあ、と千草くんはそっと思った。

きれいな字も。

きれいな姿勢も。

授業が終わって、教科書を返しにいった。

「森ちゃーん」

と名前を呼んで、教室の入り口で手を振る。

「はい」

森さんが顔を上げて返事をする。千草くんに気がつくと、ぱっと笑顔になった。足早にこちらに向かってくる。

やっぱり好きだ、と千草くんは思った。

その声も。

歩き方も。

放課後、帰る前に千草くんは森さんのクラスを覗いてみた。あわよくば、一緒に帰れたり、という下心はもちろんのことだ。

見れば、森さんは鞆に教科書やノートを入れて、今まさに帰り支度をしているところだった。

テンションが上がった千草くんは人のまばらになってきた教室に入り込むと、

「もーりーちゃん」

森さんの後ろから声をかけた。

「あら、千草くん？」

森さんが少し驚いた顔で振り返る。

「今帰り？」

「いえ。図書室に寄ってから帰ろうと」

「なあんだ。そっかー」

当てがはずれて、千草くんの声はつい残念になった。

「ふふ。千草くんは本を読む人ですか？」

「うーん。漫画なら。森ちゃんは本が好きなの？」

「そうですねえ」うーん、と森さんは斜め上空を見つめながら、声を洩らした。「嫌いではありませんけれど、好きかと問われると迷いますね。わたしは好きなものがとても少ないのです」

「へえ。そうなんだ」

「はい」

森さんは鞆を手に持ちながら微笑んだ。

ああ、いいなあ。俺も、彼女のその少ない好きなもののうちになれたらいいなあ、と千草くんは思った。けれどもそれは、思っただけではなく、口をついて出てしまっていたものらしい。

「千草くん？」

冗談なのか本気なのか、量りかねるように、森さんは首をかしげた。

「あ」

ごまかそうと咄嗟に色々な言い訳を探す。

けれども森さんの顔を見ていたら、それはみっともないことに思えた。そうしてしまえば、きっと、この先も、森さんの眼中に入ることはないというような予感がした。

「だって俺は、森ちゃんのことを大好きだから」

正直な言葉はでたらめな言い訳よりもとても素直に口を出て、千草くんはすっきりしたように自然と頬に笑みがのぼるのを感じていた。

## 好きだと言われました（森さんと鳥野くん）

---

お湯の沸く音に、森さんは耳をすませている。

鳥野くんの家だ。

森さんはおとなしく居間のソファに座って、鳥野くんが紅茶を淹れてくれるのを待っている。紅茶の葉をもってきたのは森さんだ。曰く、

「だって、鳥野くんが淹れたほうが美味しいのですもの。紅茶も鳥野くんに淹れていただいたほうが本望だと思います」

ということだ。

「紅茶の淹れ方なんて知らないけど」

カップを用意しながら鳥野くんが言う。二つのマグカップとお茶請けのえび煎餅を持って居間のテーブルに置いた。

「鳥野くんは何でも知っていらっしゃるので大丈夫です。……紅茶にえび煎餅ですか」

「他にないんだよ。文句があるなら今度から自分で持ってこい」

「そうします」

何か言い返すかと思えば、ただ頷いただけの森さんに、鳥野くんは一瞬口をつぐんで息を吸ったまま止めた。けれども、それはすぐにため息になって吐き出される。

「何かやましいことがあるな」

「そんなことはありません」

反射的に森さんが答える。

「ある」

鳥野くんは森さんを見つめた。

「どうしてそんなことがわかるんですか」

「何でも知ってるからだよ」

「まあ」

森さんは喜びそうになって、けれどもすぐに笑みを打ち消した。

「話す気がないのなら、思わせぶりなことはやめるように」

鳥野くんは肩をすくめて森さんに背を向けると、沸騰を告げているやかんのほうへと歩いていった。

やかんから、紅茶のポットにお湯をそそぐ。白く立つ湯気に、鳥野くんは目を細めた。その後ろに、そっと森さんが立つ。

「あの、鳥野くん」

「うん」

「……………」

森さんは口をつぐむ。鳥野くんは振り返らない。

「チョコレートとクッキーでしたら、どちらがお好きですか？」

「クッキー、かな」

「では今度はクッキーをもってきます」

「ああそう」

鳥野くんはポットを持って振り返った。森さんはほほえんだ。

「鳥野くんのこと、わたしが世界一幸せにしてみせますね」

「それはどうも」

鳥野くんは問い返さなかった。森さんは鳥野くんに抱きつきたかったけれど、鳥野くんがポットを持っているために淑女らしく我慢したのだった。

## 誰よりも大嫌い（森さんと雨宮くん）

---

公園を通りかかった森さんは、もう何度目かのことではあるけれど、雨宮くんを見つけた。ベンチに座って、暇そうに携帯電話をいじっている。

「せめて風の当たらないところへ行こうという頭はないのですか？」

冷たい風に首を縮めながら、森さんは雨宮くんの前に立った。

「またおまえか」

うんざりしたように、雨宮くんは顔を上げる。瞳にかかった前髪がうっとうしそうに見えた。

「わたしは、前髪が短い人が好きです」

「あんたに好かれるのなんかまっぴらだね」

「今日はまたずいぶん機嫌が悪いのですね」

「あんたがそこにいるからだろう？」

まあ、と森さんは目を見開くと、少し考えてから、雨宮くんの隣に腰を下ろした。風にさらされていたベンチはすっかり冷え切っている。

「こんなに冷たくて硬いベンチに座りたがる人を、わたしは好きになれません」

背筋をぶるりと震わせて、森さんは腕を抱えた。

足元を風が抜けていく。

「だから、好かれないなんてこれっぽっちも思ってない」

「そうして強がるばかりで雨宮くんはちっとも可愛げがありません」

「大きな世話だ」

「話していても楽しくありませんし」

「それはこっちの台詞」

「できるだけ一緒にいたくありません」

「なら構うなよ」

「わたしは雨宮くんが嫌いです」

「俺も森さんが嫌いだよ」

森さんは可笑しそうにほほえんだ。雨宮くんは怪訝そうにそんな森さんの横顔をちらりと見る。

「ねえ、雨宮くん。良いことを教えてあげましょうか」

「別にいい」

「まあまあ、そうおっしゃらずに。わたし、好きな人も少ないのですが、嫌いな人も少ないのです。つまり、雨宮くんは数少ないわたしの嫌いな人になるわけです。良かったですね」

「なんだよそれ」

「光荣でしょう？」

森さんがほほえむ。

「どういう思考回路してるんだよ」

雨宮くんは森さんの頬を引っ張ってやりたいと思った。

「それから、機嫌が悪いのはお腹が空いているせいですよ」

言って、森さんは鞆の中からえび煎餅を取り出した。どうぞ、とそれを雨宮くんに渡す。

「えび煎餅を持ち歩く女……」

「違います。それは先ほど鳥野くんの家に遊びにいった折にいただいたのです」

早口に森さんが言った。頬が薄く染まっている。えび煎餅を持ち歩いていると思われるのは少々恥ずかしかったらしい。溜飲を下して、雨宮くんはえび煎餅を受け取った。

では、と森さんが立ち上がる。スカートを軽く払った。

「森さん」

「はい」

「俺もひとつ良いことを教えてあげるよ」

「あら、何でしょう」

「俺は嫌いな人ばかりだけど、その中でも森さんが一番だ」

「それは」

光栄ですね、と森さんは面白そうに笑う。

「そういうところが気に食わないんだよ」

険のある言葉を吐きながら、雨宮くんも笑っていた。

風が吹く。

向こうのとおりを、人が、コートの前をおさえながら前かがみに歩いていった。

確かにこの場所は寒いな、と雨宮くんはようやく思ったのだった。

## たそがれ（千草くん）

---

放課後の教室で、千草くんは横顔に夕日を浴びていた。

頬杖をついて、目はどこか遠くを見つめている。

それから、ときどきため息をついて、ふっと何かを悟ったような笑みを唇にのせた。

「この恋は、この時間に凍結されるんだな」

いつもよりも丁寧な発音で、千草くんは呟いた。

教室には千草くんのほかに、彼を心配して残っていた友人が数名遠巻きに見守っていた。彼らは心配そうに顔を見合わせる。「ショックで頭をやられたんじゃ」「いや、元から千草はああいふ奴だろう」と囁きあう声が千草くんにも聞こえたが、聞こえなかったことにした。

瞳に差し込む夕陽がまぶしくて、千草くんは目を閉じた。まぶたの裏にチカチカと光が瞬く。フラッシュのように森さんの笑顔が瞬いた。

「もう笑いかけてくれることもなくなっちゃうのかな」

生まれてはじめて、千草くんは頬に自嘲の笑みをつくった。

「それでも、俺はおぼえてるから。君のくれた笑顔も、言葉も、教科書を貸してくれた回数も」

呟いてから、何回借りたっけ、と指折り数える。

心の中で、最後のは無し、と打ち消した。

「おーい、千草一、そろそろ帰ろう？」

待っていた友人が、控えめに声をかけた。

千草くんは顔を上げて振り返る。憂いを含んだ表情で儂く笑む。

「そうだね。何があっても、日常は続いていくんだから」

「大丈夫か、お前」

千草くんは前髪をつまんで引っ張って、格好つけた笑みを保とうとした。けれどももどうやら限界で、がくっと両手を机についてうなだれる。

「駄目。泣きたい」

重たい黒い雲にどすんとのしかかられたように、千草くんが首を折る。

「良かった、正常だったか千草！」

「元気だせ、なんかおごってやるって！」

俄然元気を出したのは友人たちのほうだった。にわかに騒がしくなり、千草くんの肩や背中をたたく。

「なんだよう。痛いって」

千草くんはバンザイをするように両のこぶしを突き上げた。それから、ふと気がついたように窓に駆け寄ると、がらりと勢いよく開ける。



「森ちゃん！」

千草くんは大きな声で手を振った。外を歩いていた森さんはきょろきょろした後、窓のほうを仰いで、千草くんに気がつくと、ほほえんで手を振った。

「ばいばい！」

千草くんは負けない笑みで手を振る。森さんが背中を向けると、静かに窓を閉じた。

冷たい風に当たったせいか、頬が赤い。

「なんだ、いつもどおりじゃん」

「まあそれでこそ千草というか」

友人たちは顔を見合わせてほっとしたように笑いあう。

「はーお腹すいた。おごりおごりっ」

スキップでもしそうな足取りで千草くんは鞆を持って教室を出る。

隣の教室に目を向けた。

「ありがとう」

君を好きになって、とても幸せだった。

もう教科書を借りにいけそうにないことだけが、少しだけ淋しかった。

## わからない（鳥野くんと森さん）

---

「森さんのことがよくわからない」

と呟くと、

「簡単にわかれてたまるものですか」

という答えが返ってきた。

顔を上げれば森さんは、にこにこ底の見えない笑みを浮かべている。

鳥野くんはとりあえず紅茶に口をつけて、沈黙を濁した。

「では鳥野くんは、わたしが鳥野くんのことをすべて丸っきりわかっているとお思いですか？」

「思わない」

「そうでしょう？」

「そうだけど」

納得のいかない顔の鳥野くんに、森さんは紅茶のカップを両手で包みながら口元をほころばせた。湯気が香る。

「あなたはこういう人でしょう？とわかったように言われるよりも、わからないと言われたほうが自然です。感情も性格も、まだ定まっていはいないので。今日好きだったものが明日は嫌いになるかもしれない。今日笑えたことが明日には笑えないかもしれない。わたしたちはまだまだ曖昧でいくらでも変わっていくものなのですから」

「どこかで聞いたような話」

鳥野くんが笑う。

「人は周囲の影響を受ける生き物なのです」

森さんも笑う。

「鳥野くんはどういうわたしをご存知ですか？」

「さあ。しつこいとか、わがままとか？」

「まあ」

「俺のことを好きだとか」

「まあ」

先ほどのまあより明るい声音だ。

「それがいちばんよくわからないけど」

「まあ」

声に怒りが含まれる。

「いちばんわかっていてほしいことなのに」

「でも、明日には嫌いになってるかもしれないだろう？」

「わたしは明日も明後日もその先も、鳥野くんがわたしのことを好きだと知っています」

「どこからくるの、その自信は」

いつものことながら、鳥野くんは呆れ顔だ。

「鳥野くんは、突然わたしが鳥野くんのことを嫌いになるかもしれないとお思いですか？」

「そうだね」

「ではその分、鳥野くんはわたしのことを好きになってくださったら良いのです。わたしが鳥野くんのことを嫌いになったりしないよう、どうぞ存分にめろめろにしてくださいな」

「どういう論法」

鳥野くんは口をつけようとしていた紅茶のカップをテーブルに戻した。吹き出してしまう可能性があったからだ。

「わたしは鳥野くんに好かれます」

森さんはほほえむ。

「……どうしてそんなに俺にこだわるのかがわからないよ」

「鳥野くんの魅力について語り明かしましょうか」

「勘弁してください」

鳥野くんは両手を上げた。

良いではないですか、と森さんはほほえみとともに呟いた。「きっとこの先もずっと一緒にいれば、少しずつわかっていけるのですから」

## スマイル、プリーズ（泉くんと桜木さん）

---

泉くんは教室に桜木さんの姿を見つけると、手を上げた。

「おはよう、桜ちゃん。今日も可愛いね」

にこにこ明い笑みで言いながら、桜木さんのほうへやってくる。

「おはよう。宿題なら見せてあげないよ」

机に置いた鞆から教科書やノートをひきだしに移しながら、桜木さんは特に声の温度を変えずに言った。

「今日も綺麗だね？」

桜木さんの机に手を置いて、首をかしげて言い直す。

「言い直しても宿題は見せぬ」

桜木さんは口をへの字に曲げた。

「そうじゃなくってさ。うーん、と。君は僕の女神だ一、みたいなの」

「いや、さらに意味がわからんよ」

泉くんとしては桜木さんを喜ばせたいだけなのだが、いまいち伝わっていないようだ。

そうこうしている内に始業のチャイムが鳴った。

「ほらほら、席に着きたまえ」

「うん。あ、桜ちゃん」

「うん？」

「あとで宿題見せて」

「だから見せないと言っているでしょうに」

桜木さんの苦笑はしかし、了承しているようなものだった。

昼休みになった。

泉くんは得意げに焼きそばパンをかかげて桜木さんと森さんが昼食を食べているところへやってきた。

「じゃじゃーん。焼きそばパン！」

「そうですか」

「良かったねえ」

生温かい笑みで、森さんと桜木さんは自分たちのお弁当に箸をつける。

「あれ、寂しい反応。コロッケパンもあるんだよ？ 一口あげようか？」

差し出されたコロッケパンに、桜木さんは片手を立てた。

「ノーサンキュー」

「甘いのがよければメロンパンもある！」

「いや、だから特にパンは求めていないから」

「おにぎりはすでに売り切れだったんだよ」

「そういう問題でもなくて」

どこかずれたやり取りに、あらあらと森さんは微笑んだ。

移動教室の途中で、泉くんは桜木さん呼び止めた。

「桜ちゃん、ちょっと、こっち」

おいでおいでと手で招く。

「急がないと遅刻するよ？」

言いながらも桜木さんは応じて泉くんの近くへ歩を進めた。

「わかってる。ほらほら、あそこ」

泉くんが指差したのは窓の外。中庭に植わった梅の枝に一輪の花がほころんでいた。いつかの卒業生が記念に植えて言った梅の木だ。まだ枝は細いけれど、それだけにくつものふくらんだ蕾がきわだって見える。

「わあ。もう春がきているのかあ」

桜木さんは目元を和ませた。

「うーん。あとちょっと」

梅の木ではなく、桜木さんの横顔を見て泉くんは呟いた。

チャイムが鳴る。

「ああ、大変」

ほらほら、と桜木さんがノートで招いて泉くんを急かす。

放課後になった。

泉くんは少しばかり落ち込んでいた。桜木さんを喜ばせたいのに、空回ってばかりでちっとも上手くいかない。

「泉くん、帰らないの？」

帰ろうとしていた桜木さんが、机に沈没している泉くんに気がついて声をかけた。

「うー、帰る。一緒に帰ってもいい？」

「別にいいよ」

軽く頷く桜木さんに、がばりと泉くんは体を起こして、やった、と嬉しそうに笑った。けれどもすぐに、ああー、とがっかりしたような顔になる。

「何なの。失礼ね」

「うう、ごめん。そうじゃなくってさ」

泉くんは立ち上がりながら力なく笑った。

「桜ちゃんは簡単に俺のこと喜ばせられるのに、俺はちっとも上手くできないなあって」

言いながら、格好悪いなあ、と泉くんはため息をつく。

「おや、まあ」

ぱちくりと桜木さんは目を瞬いた後、何それ、と笑い出した。

「笑うことないじゃないか。俺は真剣なのに」

「笑わせたかったんじゃないの？」

「そうだけど」

「ありがとう、嬉しい」

桜木さんの向けた笑顔は、泉くんのほしかったものだった。

たまらずに、泉くんは桜木さんを抱きしめる。

「桜ちゃん、好きだ！」

ぎゅっと抱きしめていたので、泉くんは肝心の桜木さんの笑顔を見逃してしまった。

## 春の話（武藤先生と小林先生）

---

来年度のことを話し合う会議の予定が掲示板に増えた。

手帳にそれを書き写しながら、武藤先生はふと息を吐く。通りがかった小林先生がそれを聞きとめた。

「ため息をつくときと幸せが逃げるといふ格言を知らんのですかな、武藤先生」

小林先生は優雅に唇を曲げて人差し指を振った。

「逃げたのならまた捕まえれば良いのでは？」

表情の薄い顔で、武藤先生は手帳を閉じた。

小林先生は雷にでも打たれたように、中途半端な位置に手を上げて固まる。

「こ、これがモテる男というやつか」

「小林先生。教師ならば、あまり品の悪い言葉は使わないように」

「.....武藤先生の他の者を魅了する格言に羨望を禁じえなかったのです」

声の高さを一定に保ちながら不機嫌に言う小林先生に武藤先生は「子供ですか」とまたため息をついた。

「ところで、ため息の理由は？ 面倒な会議でも入ってましたか」

小林先生が言いながら、武藤先生の見ていた掲示板に目を向けた。

「いえ。そうではなく。来年度に向けての会議が増えたな、と少し感慨深くなってしまっていただけで」

ああ、と小林先生は頷いた。

「長いようであつという間ですよ。でも武藤先生は二年の担任だから、まだまだ、来年なんてそんな感慨じゃあすまないでしょうに」

「確かに、そうですね」

「僕らは、大人の背中を見せる仕事ですけど、いつのまにか彼らのほうが僕らの背中を追い抜いて、僕らは彼らの背中を見送ることしかできないんですね」

「.....小林先生、無理に気障なことを言おうとするのはやめたほうが良いのでは」

「くっ、僕も生徒の心に残るような一言を残したいのに、ちっとも上手くいかないんですよ！」

三年を担当している小林先生のもっぱらの悩みは、卒業に際し贈る言葉についてらしい。

「くれぐれも、彼らの晴れ舞台を台無しにするようなことはやめてくださいよ」

半ば不安な瞳を武藤先生は小林先生に向ける。

「プレッシャーをかけんでくださいよう」

小林先生は額に手を置き、天を仰いだ。

武藤先生は肩をすくめ、もう一度掲示板に目をやる。

訪れる桜の気配に、その下を歩いてゆく生徒たちの姿を想像した。





## 鳥野くん（森さん）

---

机の上に両肘をついて指を組み合わせ、その上にちょこんと顎をのせた森さんは、向かいに座る鳥野くんをじーっと見つめていた。一方の鳥野くんはじーっと机に置いた本に瞳を向けている。

図書室の窓際の大机に二人、向かい合って座っていた。カーテンの隙間から一条のオレンジが差し、境界線のように二人を仕切っている。文庫本の棚の前では、男の子が三人、書架を真剣に見つめていた。入り口に近い机には図書委員の女の子が一人、プリントにペンを走らせている。締め切られたドアの向こうから、吹奏楽部の練習する音色がかすかに響いていた。

森さんはそっとため息を吐いてみた。しかし、鳥野くんは気づいた気配も見せずに、親指で静かにページを繰る。綺麗に爪が切っている、と森さんは観察した。指が細い。男子にしては華奢なほうだけれど、森さんの手より大きいことはちゃんと知っていた。

「好きです」

「え？」

こぼれるように森さんが口にする。聞き逃したらしい鳥野くんが顔を上げて首を傾げた。森さんは微笑む。それだけで伝わるはずだ、と鳥野くんを信用していた。

鳥野くんは、壁に掛かっている時計を見上げた。

「先に帰っていていいよ？」

「嫌いです」

「何が？」

「ああもう。でも、やっぱり好きです」

呆れたような視線でも、こちらを向いてくれた嬉しさに、森さんはえへへと頬を緩める。

「変な森さん」

鳥野くんは足を組み替えた。

「そんなわたしを好きなのですから、鳥野くんも物好きですね」

「自分で言うそれ」

呆れた反応ばかりの鳥野くんを森さんは頬がふくらみそうになる。いけないわ、と思って手を当てておさえた。

チャイムが鳴った。

下校時間を告げる放送が流れる。

文庫本の本棚の前にいた男の子たちはいつの間にかいなくなっていた。図書委員の女の子がちりちりちらりと森さんたちの方へ視線を送っている。鳥野くんはぱたりと本を閉じた。椅子を引いて、立ち上がる。その動作を森さんは座ったまま瞳で追っていた。

「帰らないの？」

鞆に本を入れた鳥野くんが森さんを見る。

「帰ります」

勢いよく森さんが立ち上がると、椅子が大きな音を立てた。先に立って行ってしまおう鳥野くんを、静かに椅子を直してから急いで追いかける。図書委員の女の子に小さく会釈をして、図書室を出た。

廊下で鳥野くんは待っていた。廊下の奥の階段を何人かの生徒がにぎやかに降りていく。話し声と足音が響いて、やがて小さくなっていった。

鳥野くんは右手に鞆を持ち、左手を手の平を森さんに向けて少し浮かせた。森さんはその意味を正しく理解すると、まだ少しむくれていた頬を笑みに変えて、鳥野くんの隣りに並んだ。

## 森さん（鳥野くん）

---

机の上に両肘をついて指を組み合わせ、その上にちょこんと顎をのせた森さんに、鳥野くんはじーっと見つめられていた。一方の鳥野くんはじーっと机に置いた本に瞳を向けている。

図書室の窓際の大机に二人、向かい合って座っていた。カーテンの隙間から一条のオレンジが差し、境界線のように二人を仕切っている。文庫本の棚の前では、男の子が三人、書架を真剣に見つめていた。入り口に近い机には図書委員の女の子が一人、プリントにペンを走らせている。締め切られたドアの向こうから、吹奏楽部の練習する音色がかすかに響いていた。

森さんがそっとため息を吐く。そろそろ待ちくたびれたのだろう、と鳥野くんは推察する。よくも毎度飽きもせず待っているなと思う。一緒に帰りたいからです、と森さんが答えることを鳥野くんは知っているけれど、そのこと自体がすでに物好きなことだ。親指で静かにページを戻す。思考がずれて、本の内容を飛ばしてしまった。

「好きです」

「え？」

何か唐突なことを言われた気がした。聞き間違いかと、鳥野くんは顔を上げて問い直す。森さんは微笑むだけだ。おそらく、どうでもよいことだろう、と鳥野くんは当たりをつける。

壁に掛かっている時計を見上げた。下校の時刻も近い。

「先に帰っていていいよ？」

「嫌いです」

「何が？」

「ああもう。でも、やっぱり好きです」

森さんはえへへと頬を緩める。勝手に機嫌を損ねて、また勝手に直している。

「変な森さん」

鳥野くんは足を組み替えた。

「そんなわたしを好きなのですから、鳥野くんも物好きですね」

「自分で言うそれ」

しかし否定はできない。森さんを物好きだと思ったけれど、確かに自分も相当だ。

チャイムが鳴った。

下校時間を告げる放送が流れる。

文庫本の本棚の前にいた男の子たちはいつの間にかいなくなっていた。図書委員の女の子がちらりちらりと森さんたちの方へ視線を送っている。鳥野くんはぱたりと本を閉じた。椅子を引いて、立ち上がる。その動作を森さんは座ったまま瞳で追っていた。

「帰らないの？」

鞆に本を入れた鳥野くんが森さんを見る。

「帰ります」

勢いよく森さんが立ち上がると、椅子が大きな音を立てた。森さんが立ったのを見ると、鳥野くんはさっさと背を向けて図書室の出口へ向かった。慌てて森さんが追いついてくる気配がする。この瞬間が、実は好きだということは森さんには内緒だ。

廊下に出たところで森さんを待つ。振り返ると、急ぎ足だった歩を森さんがぴたりと止めるところだった。目が合うと微笑む。廊下の奥の階段を何人かの生徒がにぎやかに降りていく。話し声と足音が響いて、やがて小さくなっていった。

鳥野くんは右手に鞆を持ち、左手を手の平を森さんに向けて少し浮かせた。どうせうるさく要求されるから、などと頭の中でいくつかの言い訳が並ぶ。森さんはすぐに笑みになって手を重ねてきた。隣りに並んで歩く。

この距離で歩きたいからという素直な言い訳は、つないだ手から伝わるだろうと過信しておいた。

下校のチャイムが響く。少し遅れて、下校を促す放送が流れた。

教室に残っていた生徒は、ばらばらと鞆を持って立ち上がる。男子生徒の一人が、うっかり鞆をひっくり返して床に教科書をばらまく。何やってんだよ、と笑われながら、周囲の友人たちが拾うのを手伝っていた。

校庭では、野球部の生徒がトンボを持って駆けている。飛び込んだサッカーボールが綺麗に均されたグラウンドに跳ねて怒鳴られていた。グラウンドの端にある弓道場では、的がはずされているところだった。袴姿の女生徒が、穴のたくさんあいた的をそっと手のひらで撫でる。ほかの女生徒が寄ってきて、何やら話しかけて楽しげに笑っていた。

昇降口からは次々に生徒たちが出てくる。手をつないだ男子の生徒と女子の生徒が出てくると、待ち伏せていたらしい男子生徒が女子生徒にチョップをした。女子生徒と男子生徒がいさかいを始めると、手をつないでいた男子生徒は先に行ってしまう。女子生徒が慌てて追いかけると、男子生徒も何か言いながらそれに続いた。

そこへ、女生徒が一人駆けてきて、先の女子生徒に背中から抱きついた。そのまま腕を組んで笑いながら話し出す。その後から駆けてきた男子生徒が、わっ、と仲の良さげな女子生徒二人の肩にのしかかる。容赦のないチョップが、先を歩いていた男子生徒から飛んできた。笑い声が弾ける。

誰もいなくなった教室で、開け放しになっていた窓を、見回りの教師がぴたりと閉じた。外を帰る生徒たちの声がぱちりと閉めだされる。教師は校門を出て行く生徒たちの背中をしばし見送ってから、机が整頓されているのを確認して、教室を出た。

静かにドアを閉じる音が、夕陽を蓄えた教室に小気味よく響いた。

## 進化するボクラ【3】

<http://p.booklog.jp/book/39882>

著者：猫ト みかん。

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/7hoshineko/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/39882>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/39882>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.